

毒も薬になる話

冬空の下、色づいたファンツバキが美しい季節となり、年の瀬を感じる時季となりましたが、皆さまお変わりなくお過ごしでしょうか？ 今年にはコロナウイルスとの戦いとも言える一年でしたが、人類と細菌やウイルスなどの微生物との戦いの歴史は古く、昔からずっと

続いていきます。しかし、私たち人類はそういう微生物を薬として利用し、役立ててきました。中でも有名なものにボツリヌス菌があります。

この菌は日常の土壌や海、川、湖などの泥砂中に分布しており、その産生する毒素ボツリヌス毒素は地球上で最強の毒素といわれています。

その毒性は非常に強く、フグ毒「テトロドトキシン」の約1万倍といわれています。

この毒素は神経と筋肉の接合部に作用し、神経伝達物質の放出を阻害して筋肉をまひさせる神経

毒です。私たちはこの作用を利用し、一時的に筋肉をまひさせて緊張を和らげ、筋肉のこわばりが特徴的な病気の治療に役立てています。

この治療法はボツリヌス療法と呼ばれます。製剤化されたごく微量の成分を筋肉内に注射する治療法で、この成分は神経筋の伝達を阻害するため、脳卒中後の後遺症の片まひや筋肉の痙縮（けいしゅく）を緩めたり、目の周りのけいれんを和らげたりするのに利用され



れます。現在、許可を持つ医師に使用が限られ、疾患によっては医療保険の適応が認められています。また自費診療で「ボトックス®」という名で美容外科の「しわ取り薬」として利用する場合もあります。

「薬にも毒にもならない」ということわざもありますが、このように「薬にも毒にもなる」ものもあります。いつかコロナウイルスが詳しく解明され、人類に役立つ日が来ることを願って。

（薬剤師 西 美香）

薬語 やまやま

[72]

松阪地区薬剤師会

